

# 「お話」を聴くということ

## —聴くことばからのイメージのふくらみ—

古茂田 貴 子

### はじめに

絵本や物語に親しむ活動は、子どもたちのことばの発達を促す保育活動として欠かせないものの一つに挙げられる。

絵本や物語に親しむために、保育現場では絵本の読み聞かせをはじめ、紙芝居や人形劇、ペープサートや映像など様々な視覚的な補助を加えた活動が行われている。一方で絵本や物語に親しむ活動として、絵や人形、映像といった視覚的なものを用いずに昔話や物語を語る行為がある。この行為は様々な呼ばれ方をするが、本論文では「お話」と呼ぶ。

保育現場において「お話」は、絵本の読み聞かせなどと比べると活動として取り上げられる機会が少ない。その理由は様々あると考えられるが、本論文ではその点には言及しない。本論文で注目したい点は、「お話」の独自性である。

「お話」と絵本の読み聞かせがことばの育ちを促す活動として、子どもたちの学びにとって変わらないのであれば、絵本の読み聞かせだけで充分であり、「お話」が取り上げられることの少なさについて特に論じる必要はない。

しかし、論者は絵本の読み聞かせと「お話」はことばの育ちを促す活動としてどちらも必要な活動と考えている。なぜならば、両者それぞれに聴き手である子どもたちへの学びに違いがあると考えられるからである。

そのように考える理由の一つに絵本の読み聞かせと「お話」の視聴覚的な補助の有無といった手法の違いがあげられる。この手法の違いによって、聴き手である子どもたちに学びの違いが生まれていると考えられる。

学びの違いを明らかにすることで、絵本やお話に親しむ活動の一つとして、保育現場で「お話」をより積極的に取り入れていく重要性を説くことができると考える。

本論文では、子どもたちのことばの教育における絵本や物語に親しむ活動における「お話」の意義について論じたい。

### 1. 保育における絵本や物語に親しむ活動の位置づけ

学校教育法において、幼稚園でのことばの教育は「日常の会話や、絵本、童話等に親しむことを

通じて、言葉の使い方を正しく導くとともに、相手の話を理解しようとする態度を養うこと<sup>1)</sup>と表記されている。

学校教育法の幼稚園の教育において、ことばの教育に言及しているのは上記一文のみである。その中で、ことばの教育の基本として「日常の会話」と「絵本、童話に親しむ」の二点が挙げられている。

また、学校教育法に基づき、幼稚園の教育課程の基準として作成されている幼稚園教育要領における領域言葉の3項目の内のねらいの2項目では、それぞれ「自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう」<sup>2)</sup>「人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう」<sup>3)</sup>と、学校教育法で表記されている「日常の会話」の大切さについてより詳しく述べている。

そして領域言葉のねらいの最後の1項目は「日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる。」<sup>4)</sup>と表記されており、日常生活に必要な語彙をふやしていくことと共に、絵本や物語に親しむことの大切さを述べている。

このように、学校教育法・幼稚園教育要領共に、ことばの教育の基本として「日常の会話」と「絵本や物語と親しむ」の二点が挙げられている。

つまり、「絵本や物語と親しむ」ことは幼児期の子どもたちのことばの教育において欠かせない重要な活動であると考えられており、それ故に保育の中でこの活動を充実させるように法律でも明記されていることがわかる。

## 2. 絵本や物語と親しむ活動の効用

絵本や物語に親しむ活動の効用は数多く挙げられるが、特に重要と考える三点を挙げたい。

### (1) 豊かなことば体験

上記で引用した学校教育法において、「日常会話」と「絵本や童話に親しむ」ことを通して「言葉の使い方を正しく導き」「相手の話を理解しようとする態度を養う」という二つのことばの教育の目標が表記されている。

「日常会話」と「絵本や童話に親しむ」の両活動は、とても豊かなことばの体験や経験を積む活動である。松井が「心の中にゆたかなことばがたくわえられていないと、人の気持ちを感じとり、人と気持ちをかよい合わせることはできません。人の恐れや痛みや苦しみや憎しみをおもいやることもできません。」<sup>5)</sup>と述べているように、豊かなことばの体験や経験を積むことで、ことばの使い方や自分との対話そして他者理解が深くできるようになるといえる。

また、松井は本に書かれた物語を「声の文化」ととらえ、絵本は本質的に「声の文化」である、と述べた上で、「ことばの世界に深く入り込む力は、生まれたときから耳をとおして聴く、声のこ

とばの体験の積みかさねが鍵です。つまり、「声の文化」をどれほどゆたかに身につけて育ってきたかが問われることになります。」<sup>6)</sup>と、豊かなことばを身に付けるための乳幼児期の「絵本や童話に親しむ」活動の重要性を述べている。

幼稚園教育要領においても、「絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせてたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること」<sup>7)</sup>と書かれており、幼稚園教育で絵本や物語に親しむことを通して、子どもたちに豊かなことばのイメージを育てていくことを期待している。

## (2) 主体的にことばに耳を傾ける

「相手の話を理解しようとする態度」とは、相手のことばに耳を傾けるということでもある。他者のことばに耳を傾けるということは、一見受動的に見えるが、実はとても能動的な活動である。相手のことばに耳を傾げるためには集中力を要する。また、その集中力を維持しなければならない。このように能動的な活動を維持するためには「聴きたい」「聴こう」という気持ちを育てることが先決である。そのために「聴く」ことが楽しいという体験を重ねていくことが重要である。「お話を楽しむことはおぼえないで、人の話はだまって聞くものだといった形の上の礼儀だけは身につけているのが何だかかわいそうに思えてしまう。」<sup>8)</sup>と松岡が述べているように、「聴きたい」「聴こう」という気持ちを育てる前に「ねばならない」といった形式的・強制的な押し付けをしてしまうと、子どもたちは形式にばかりしばられてしまい、一見静かに聞いているような様子をしていながら、本当の意味でことばに耳を傾け「聴く」という活動につながらなくなる恐れがある。そのようになってしまうと、聞こえてくることばをしっかり「聴いて」ことばからイメージを膨らませたり、考えたりする大切な活動が失われてしまう。

「絵本や童話に親しむ」ことは、ことばを聴くという活動が主体となる。物語の世界は昔から子どもたちのみならず、多くの人々を魅了し続けている。故に、「絵本や童話に親しむ」活動は、「相手の話を理解しようとする態度」を子どもたちに無理なく、そして主体的にことばに耳を傾ける体験を日々重ねていける活動と言える。そして、主体的にことばに耳を傾ける体験を重ねることによって、やがて小学校に入学した後の一日何時間もある授業に主体的に取り組める力がつくということにもつながっていくと考える。

## (3) 「読む」という意欲を育てる

学校教育法では、幼稚園でのことばの教育は音声言語の習熟を主にした内容が書かれている。幼稚園教育要領においては10項目からなる内容の最後の項目に「日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう」、また4項目からなる内容の取扱いの最後の項目に「幼児が日常生活の中で、文字などを使いながら思ったことや考えたことを伝える喜びや楽しさを味わい、文字に対する興味や関心をもつようにすること。」と表記されている。それぞれ最後の項目ながら文字について言及さ

れているのは、幼児期に「聞く」「話す」活動を育てるだけでなく「読み」「書き」についての萌芽も育てていくという考えの表れであると考え。

音声言語と文字とは大きな隔たりがあるが、その目に見えない壁を越えていくために、絵本や物語と親しむ活動が大きな力を持っていると考える。

「読む」という行為は、文字を読むということと、文章を読むという段階がある。文字を理解し読むことを経て、最終的には後者の「読む」活動を充実させることが読むということである。松岡が「本を読むためには、ことばが表わしているものについての知識だけでなく、ことばが描き出す情景を生き生きと心の中に再現する能力や、主人公の気持ちに同化する能力、つまり想像力が必要になってきます。」<sup>9)</sup>と述べているように、しっかりと読むためにはことばから想像する力が欠かせない。音声言語と文字とは大きな隔たりがあると前述したのは、「たとえ字を少しおぼえたといっても、四、五歳から、おそらくは十一、二歳くらいまでの子どもでは、話されたことばを聞いて理解する能力のほうが、書かれたものを読んで理解する能力よりも、ずっと先を行っていると考えてよいでしょう。」<sup>10)</sup>と松岡が述べているように、文字を読み、そこからことばとして理解するその行為の困難さがその一因であると考え。つまり、「言語とは、圧倒的に声に依存するもの」<sup>11)</sup>であり、話されたことばを聞いて理解する能力と書かれたものを読んで理解する能力は全く異なる性質であるからである。

聞くことと読むことは質は違うが、ことばを通して「想像する」「考える」というところにつながっていくことは同様である。松岡が「読む力が聞く力に追いつくまでのこの時期は、本というものに対する興味や信頼をつなぐ意味でも、知的にも情緒的にも、子どもの中の、いちばん高い、発達した部分を刺激するためにも、おとなが本をよんでやることはよいことだと思います。」<sup>12)</sup>と述べているように、絵本や物語に親しむ活動は、ことばから想像を膨らますことをしっかりと楽しみ、そして読書への興味を養っていくことへとつながっていくと考える。

### 3. 「お話」と絵本の読み聞かせとの違い

絵本や物語に親しむ活動として、保育現場で最も行われているものは絵本の読み聞かせであろう。松岡が「読み聞かせは、文学作品を、声によって表現し、それを聞き手がともにその場にいてたのしむという点で、お話とまったく同じといってもよいでしょう」<sup>13)</sup>と述べているように、「お話」と絵本の読み聞かせは同じ様なものととらえられることが多い。

確かに多くの点で似ているところはあるが、しかし、はじめにで前述しているように「お話」と絵本の読み聞かせは手法に違いがあり、その違いによって子どもたちの学びに違いがあると考え。「お話と読み聞かせは兄弟のように親しい関係にあるといってもよいでしょう。」<sup>14)</sup>と、松岡も両者は多分に似ているところが多いが、違う活動であると述べている。また、松岡は「読み聞かせとお話を両方ともしてみた者の実感からいえば、この二つには、やはりかなり違いがあります。」<sup>15)</sup>とも述べて

いる。

「お話」と絵本の読み聞かせの間に存在する違いこそ、子どもたちにとって幅広い学びの機会を保証することになると考える。松岡が「お話にはお話の、読み聞かせには読み聞かせのよさがある」<sup>16)</sup>と述べているように、それぞれの特色や良さがあると考えられる。そしてその特色や良さを理解できれば、より活動が意義深く幅広くなると考える。

はじめにでも論じたように、子どもたちの学びに違いがあると考えられる故に、絵本や物語に親しむ活動として絵本の読み聞かせと並行して「お話」を保育現場においてもっと取り入れられるべきだと考えている。「お話」独自の学びについて明らかにするために、「お話」の特色について論じたい。

### (1) 子どもとの物理的・精神的距離感

「お話」は語り手が昔話や物語を直接子どもたちに語りかける。語り手は子どもたちの目を見ながら語りかけ、子どもたちは語り手を見ながらお話を聴くことになる。つまり、「お話」では語り手と聴き手が直接つながっているといえる。一方で絵本の読み聞かせでは読み手は絵本を見ながら読み、子どもたちは絵本を見ながら読み手の声を聴く。つまり、読み手と子どもたちの間には本があり、本を挟んで読み手と子どもたちがつながっているといえる。このように、「お話」は語り手と聴き手が直接結びつく手法がとられており、絵本の読み聞かせと比べて語り手と聴き手の物理的に距離がより近いと言える。

また、子どもたちは語り手と物理的だけでなく、精神的にもより近くに感じながら「お話」を聴いていると考える。コミュニケーションの基本は目を合わせることから始まる。ことばを交わすときにも目を合わせることは欠かせない。そのことから考えると子どもたちに目を合わせながら直接語りかける「お話」の方が語り手と聴き手の精神的な距離を縮め、自分に語りかけられていると感じることで聴き手が語り手に対してより親しみの気持ちを起こし、それにより「お話」をより楽しむという気持ちが生み出されるのではないかと考える。もちろん、絵本の読み聞かせも十分準備を重ねて取り組めば子どもたちと目を合わせるような場面を多く設けることができるであろう。しかし直接語りかけることはやはり別な活動になると考える。松岡は、「お話」と絵本の読み聞かせ両方を行った時の子どもたちへの伝わり方として、絵本の読み聞かせは「やってみた者からいえば、終始子どもたちの目をしっかり見ながら、直接語りかけるお話の手ごたえとは、まったく違います。そして、それは、聞く子どもたちが受ける感じからいっても、ずいぶん違うものだろうと思います。」<sup>17)</sup>と述べている。

また、河合は「読み聞かせというのは、下手な人は本のほうに心がいつているんですね。ちゃんと読まねばならないとか、ここは怖い声で言おうとかやっているわけだけども、子どものことは忘れられたりする。ほんとうは子どもとの関係のなかでなされてこそ意味があるのです。その点で語りというもの、私の父親のように、自分の覚えているのをしゃべってくれるので、はるかに人と人とのつながりがあると思うんです。」<sup>18)</sup>と述べている。このように「お話」(語り)は物語をしつ



かり自分自身のものにした上で語られ、「お話」を語る場では気持ちは、「お話」の内容ではなく、子どもたちに向かっている。それ故に語り手と聴き手の精神的な距離がより近くなると考える。

語り手と聴き手の物理的・精神的な距離が近くなることによって、子どもたちの「お話」を聴こうという意欲がより育ち、その結果、より「お話」の世界に深く入り込むことができ、楽しむことができると思う。

## (2) ことばによる子どもたちへの物語理解の手助け

絵本は絵と文章の総合芸術であると言われる。優れた絵本には力のある物語や文章と絵との組み合わせが重要であるが、何よりも絵があることが絵本の所以である。絵の力によって物語の世界の理解を深め、広げていく。つまり、絵本の読み聞かせでは絵が子どもたちの物語理解を助けていると言える。

一方で「お話」は絵のような視覚的補助はない。あくまで語り手が自身のことばで語っていく。その際の子どもたちの物語理解の助けとなるものは、「語り手自身のことば」である。

脇が「幼い子どもの場合は、物語がまだうまくつかめず、どこがどうおもしろいかわからないことも多いので、身近な大人が自分自身の想像力を働かせ、感情を動かしながら読んでくれるのが、とても大きな助けになります」<sup>19)</sup>と述べているように、読み聞かせにおいても、書かれている文章を解釈しながら伝えることで、子どもたちの物語理解の手助けをしているといえる。

しかし「お話」の方がより聴き手の物語理解を大きく手助けしていると思う。なぜなら、「お話」はことばを暗記するだけでなく、物語の世界を語り手自身が頭の中で絵にして、様々なことを想像しながら子どもたちに語りかける行為であり、語り手自身の物語に対する理解や思いが物語に加わることによって子どもたちにとってより理解しやすい状況になると考えるからである。松岡はこの状況を「お話と語り手の“化合”」<sup>20)</sup>と呼び、「語り手が、話をすっかり自分のものにしてしまったときには、物語の諸要素と語り手の個性とは、ひとつにとけあって、物語は、単に活字に還元してしまえる物語ではなく、語り手によって命を吹き込まれた物語に変わる」<sup>21)</sup>と述べている。自分のことばとして「お話」を語ることで、子どもたちにとってより物語を理解しやすくなっていると思う。故に「お話」は語り手が物語に命を吹き込むことで、「お話」のことばを聴いて理解する、子どもたちの活動をより面白くわかりやすくしていると思う。

また、このようにことばからの想像を楽しめることは、読書を楽しめることにもつながると考える。松岡は「読書ができるためには、単に字がよめるというだけでなく、もっとほかの能力が要求されると思います。とりわけ重要なのはことばの力と想像力だとおもいますが、これは、お話が育てる力に含まれます」<sup>22)</sup>と述べている。「お話」の世界で楽しめるようなことばから想像を膨らます力を養うことができれば、本を楽しく読めるような力も養われるのではないだろうか。

### (3) ことばから想像する力及びその想像の独自性

前述したように、絵本の読み聞かせでは子どもたちは絵の力によって物語の理解を深めていると考えられるが、一方でその絵がことばから想像することによる物語理解の妨げになっているかもしれないという考え方もある。脇は、絵本をたくさん読み聞かせてもらって育ってきたながら、本を読むのが苦手だという学生が増えてきたと感じ、「ひょっとするとその人たちは、絵本を読み聞かせてもらうことによって、「絵を見る」ことだけを学び、言葉に耳を傾け、物語をたどってたのしむことは身につけてこなかったのかもしれない」<sup>23)</sup>と述べている。絵本では物語の補足のように絵が描かれていることが多く、ある程度絵を追っていけば物語の流れが分かることが多い故に、途中でわからなくなっても、絵を眺めているとなんとなく理解ができるときがある。

絵は物語を想像する大きな力となるが、絵の力が強いことにより逆にことばから物語を想像することの妨げになっているとも考えられる。脇は「絵がカラフルであれば、こうした想像のステップをひとつ省略することができますが、そうやって楽をすればそのぶんだけ想像の森は「与えられたもの」になってしまい、「自分のもの」ではなくなります」<sup>24)</sup>と述べている。

「お話」では、聴き手である子どもたちが聴いたことばから自分自身の力で物語を絵にして理解していかなければならない。絵や映像といった視覚的補助なしに、聴いたことばからだけで頭の中に絵を描いていく作業は、視覚的補助があるものと比べてより集中力や想像力を要する。それは、実際に論者が「お話」と絵本の読み聞かせを学生にした際、「絵本の読みきかせの方が楽」という聴き手の学生からの感想からもうかがえる。そして、絵などの視覚的補助なしにことばからだけで想像していくことは、子どもたちにとって我々以上に困難な作業であると考えられる。

しかし、「お話」を楽しむことによって聴き手それぞれの頭の中に想像されて描かれた絵は、それぞれ自由な絵になると考えられる。つまり、絵がないことによって想像の独自性が生まれると考えられる。松岡は「ことばだけを頼りに、自分の想像力を働かせて物語を絵にしていく作業は、テレビのいわば「あてがいぶち」の絵をみていくより、ずっと苦勞の多い作業でしょう。それに生活経験の少ない子どもが描くイメージは、ときとして、とんでもないものであったり、まちがっていたりするかもしれません。しかし、たとえそれらのイメージが、テレビが子どもにさし出してくれるイメージより数等貧しいものであっても、なおかつ、自分で描くということに大きな意味がある」<sup>25)</sup>と、述べている。自分なりにことばから想像して頭の中に絵を作っていく作業は、絵のような視覚的補助がなくすべて自前の経験や想像で作っていく作業である故に困難ではあるが、一方で絵などの視覚的補助に縛られない分とても自由ともいえる。また、その自由さがそれぞれの子どもの想像の独自性を生み出し、ひいては子どもたちの個性を伸ばしていくと考えられる。

そして、この想像の独自性こそが「お話」を通しての大きな学びであると考えられる。

#### 4. 「お話」と絵本の読み聞かせの体験とアンケート調査について

本論文では、「お話」を聴くことによる想像の独自性に注目し、これらを明らかにするために実際に同じ物語を「お話」と絵本の読み聞かせで体験してもらい、その内容についてアンケートを実施し、検証を行った。

子どもたちのことばの育ちの一環としての「お話」や絵本の読み聞かせであるが、保育現場においての「お話」や絵本の読み聞かせは、物語自体を楽しんでもらうことが第一であり、物語を聴き終えた後に、感想やあらすじのおさらいなどはしないというのが基本である。松岡は「避けていたいただきたいのは、お話のあとすぐに、何かまた別の、精神の集中を要するような活動に移ること、それと、今のお話にはだれが出てきた、何をしたといったたぐいのおさらいをすること、お話をだしにしてお説教をすることです」<sup>26)</sup>と述べ、またもしそういったことをすれば「子どもたちは、はぐらかされたような、裏切られたような感じをもつに違いありません」<sup>27)</sup>と述べている。

「お話」や絵本の読み聞かせの活動は、物語そのものを楽しむことによって、想像する力を育み、豊かなことばを育てていくためのものであり、それぞれの子どもたちが想像したことをことばにすることや、物語のあらすじをまとめるための活動ではない。もし、聴いた後になんらかのことばで表現したりまとめたりしなければいけないというようなことが前提となってしまうと、聴き手である子どもたちは、ことばにすることに気を取られてしまい、物語の世界を楽しみ、想像を十分にふくらますことができにくくなるを考える。それ故に、「お話」や絵本の読み聞かせを楽しんだ後で、それについて論理的に違いを明らかにするような作業を子どもたちに担わせること及び、その作業が的確にできるのかということについて検討を行い、本論文では幼児教育を学ぶ学生に対して調査を行った。

調査日時 2014年1月

対象 大阪総合保育大学 2年生 127名

調査内容 「お話」と絵本の読み聞かせの体験とアンケート調査（選択形式・記述）（回答者105名）

「お話」は、なるべく学生たちが初めて聴くものでありかつ聴きやすい物語として、イギリスの昔話「ちいちゃいちいちゃい」(石井桃子訳)<sup>28)</sup>を選定した。絵本の読み聞かせは「お話」に対応する『ティニータイニーちいちゃいおばちゃん』<sup>29)</sup>を使用した。絵本の内容は「お話」とほぼ同じであったが、ことばを統一するために絵本に「ちいちゃいちいちゃい」の文章を貼り付けて作成し、「お話」に合わせた形式にした。

まず、アンケートの説明をした後、絵の先入観がつかないように「ちいちゃいちいちゃい」の「お話」を先に聴かせ、「お話」を聴いて想像したことについてのアンケート後、『ティニータイニーちいちゃいおばちゃん』を使用した「ちいちゃいちいちゃい」の絵本の読み聞かせを行い、再び同様のアンケートを回答してもらった。

アンケート内容は、各自様々な想像をしている中で、身長や帽子の色といった具体的にわかりや



すい質問とし、また各自の想像内容がより分かるように自由な記述も併せてしてもらった（資料3参照）。

### (1) おばあさんの身長について

この昔話は、「ちいちゃいちいちゃいおばあさん」ということばが何度も繰り返し出てくる（資料1参照）。「ちいちゃいちいちゃい」という繰り返しを聴くことによって、「お話」で聴いた際は30cmくらいまでの小さなおばあさんを頭の中で想像するのではないかと予想した。また、絵本の読み聞かせ後は、絵のおばあさんの姿（ひまわりよりも小さく描かれている）（資料2参照）から想像して、100cm前後になるのではないかと予想した。つまり、「お話」から想像するものと絵本を見てからの想像では違いがあると予測した。

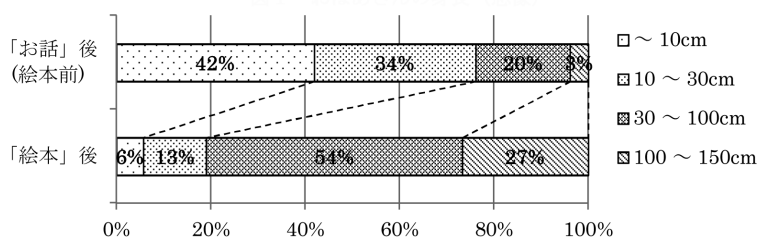


図1 おばあさんの身長（想像）

結果は図1に表したように、約42%の学生が10cm以下の親指姫サイズのおばあさんを想像した。そして、約34%の学生が10cm~30cmのおばあさんを想像した。30cm~100cmのおばあさんを想像した学生は約20%、100cm~150cmという小柄なおばあさんを想像した学生は全体のわずか約3%であった。

一方で、絵本の読み聞かせで絵を想像の補助に使った後の同じ質問では、一番多かった回答は約54%と、半数以上の学生が想像した30cm~100cmのおばあさんであった。次に多かった回答は、100cm~150cmという小柄なおばあさんを想像した学生で全体の約27%であった。また、10cm~30cmのおばあさんを想像した学生は約13%、「お話」を聴いた後では最も多かった10cm以下の親指姫サイズのおばあさんを想像した学生はわずか約6%であった。

「お話」を聴いた後でのおばあさんの身長は、約76%の学生が30cm以下と想像した。一方で、その後の絵本の読み聞かせを行った後では、約81%の学生が30cm以上と想像した。このように、絵を見る前と後ではおばあさんの身長の想像が大きく変わっており、全体の87%が「お話」後と絵本の読み聞かせ後とではおばあさんの身長に対する想像が変化している（図2参照）。

また、「お話」後のおばあさんの身長の想像より、その後絵本の読み聞かせを聴いて改めてのおばあさんの身長の想像の方が高くなっている傾向が大きく、約79%の学生が絵本の読み聞かせ後に

おばあさんの身長を高く答え直している。これは、絵を見ずに想像しているときには「ちいちゃいちいちゃい」ということばの繰り返しから、一寸法師や親指姫のような小さな主人公を想像したと思われる。しかしその後、絵本の絵を見ることで絵の中の主人公の背景との対比で大きさを測り直した学生が多かったものと考えられる。

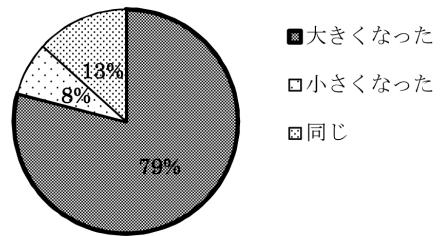


図2 おばあさんの身長（想像）の変化

## (2) おばあさんの帽子の色について

主人公のおばあさんがかぶっていた帽子の色についての質問に対し、様々な色の表記での回答があったので、例えばエメラルドグリーンや深緑は緑系等、色の系統でまとめた。

「ちいちゃいちいちゃい」には、主人公のおばあさんが帽子をかぶる表現はあるが、帽子の色や形については言及していない（資料1参照）。故に「お話」を聞いた直後のおばあさんの帽子の色や形については、絵や具体的なことばからの影響を受けず、「お話」を聴く中で聴き手自身が想像したものがそのまま記述されていると考えられる。

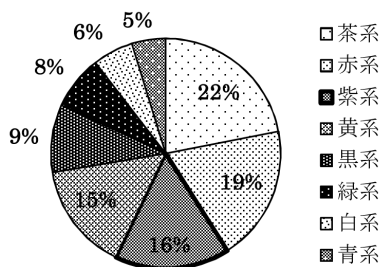


図3 「お話」後（絵本前）の帽子の色

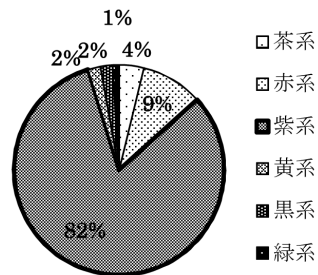


図4 「絵本」後の帽子の色

「お話」を聞いた直後の帽子の色の想像で、一番多かったものは茶系の約22%であり、次に多かったのは赤系で約19%であった。三番目に多かった帽子の色の想像は紫系で約16%、四番目が黄色系で約15%、以下順に黒系が約9%、緑系が約8%、白系が約6%、青系が約5%となっていた（図3参照）。このように、「お話」のことばのみで自由に想像した場合、多くの色が挙げられ、色の系統としては8系統に分けられた。また、挙げられた8系統の色は、どれかが圧倒的に多いというものではなく、ある程度まんべんなく挙げられていた。

絵本では、おばあさんは紫色の帽子をかぶっている姿が描かれている（資料2挿絵参照）。それ故に絵本の読み聞かせでは、絵を見ることにより、聴き手の想像に絵の影響が大きく出ていると考えられる。

結果は、絵本の読み聞かせ後に改めておばあさんの帽子の色について質問したところ、絵本で描かれている帽子の色と同じ紫系と答えた学生が約82%いた。(図4参照)。

また、「お話」直後では8種類の色に想像が分かっていたが、絵本の読み聞かせ後には色の種類が6種類に減り、そして紫系一色が圧倒的に多く、他の色はごく少数という割合になった。

おばあさんの身長の際と同様に、「お話」を聞いた直後は各自自由に様々な帽子の色を想像している様子が見て取れるが、絵本の読み聞かせ後になると、紫の回答が圧倒的に多くなり、回答の色のバリエーションが減っているのは、絵本の絵の印象を強く受けて、絵本で描かれているおばあさんをイメージして回答しているからではないかと考えられる。実際、絵本の読み聞かせ後に、約87%の学生のおばあさんの帽子の色の想像が変化している。(図5参照)。これは、「お話」後の自由な想像で考えていた帽子の色をその後に絵を見ることで、聴き手である多くの学生が、自分の想像ではなく絵で表現されている色に置き換えるということを行っていたと考えられる。

帽子の形についても帽子の色と同様の結果が見られた。

「ちいちゃいちいちゃい」の文中には帽子の形状についての言及はない。それ故に、帽子の色の時と同様に、「お話」後の自由記述では、聴き手の「お話」を聴く中で自由に想像した帽子の形が記述されていると考えられる。

自由記述の中で、帽子の形について書かれているものをまとめると、「お話」を聞いた直後では11種類の形状に分かれた(図6参照)。最も多かったものは麦わら帽で、帽子の形について書かれた自由記述中22%であった。以下順にニット帽が20%、ベレー帽15%、ハット帽12%となっている。

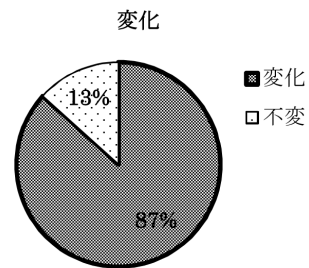


図5 おばあさんの帽子の色の变化

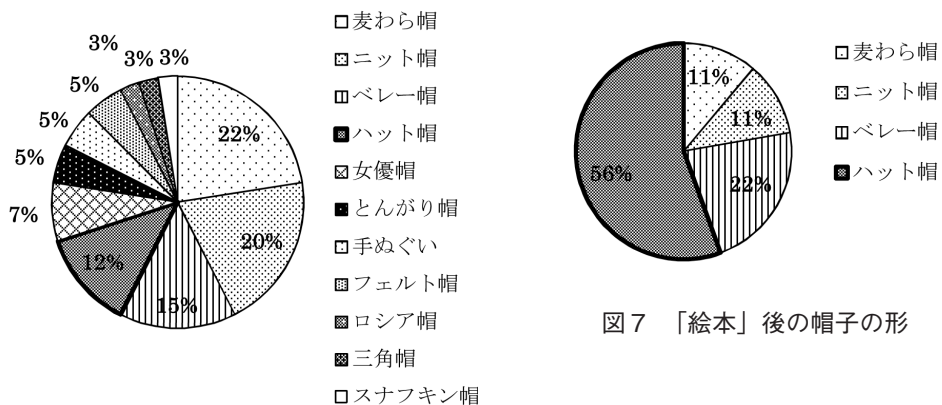


図6 「お話」後(絵本前)の帽子の形

図7 「絵本」後の帽子の形

絵本ではおばあさんは紫色のハット帽をかぶっている姿が描かれていた（資料2挿絵参照）。絵本の読み聞かせ後では、自由記述の半数以上である、56%にハット帽の記述がみられた。また、帽子の種類は11種類から4種類に減少している。

これらの結果は、帽子の色の時と同様に、聴き手各自の自由な想像に絵本の絵が大きな影響を与えていると考えられる。

### (3) その他の記述より

自由記述の中で主人公であるおばあさんの年齢についての記述が多く見られた。そして「お話」を聞いた後と絵本の読み聞かせ後ではおばあさんに対する年齢の想像が大きく変わっている様子が見られた。

「お話」を聞いた後では、自由記述で年齢を書いた学生の半数が70代と回答している。次いで30%の学生が80代と答えている。つまり、「お話」後の自由記述の8割の学生が主人公のおばあさんは70～80代と想像している。20歳前後の学生の祖父母はちょうど70～80代であろうことを考えると、「お話」を聞いて「おばあさん」ということばから、自分たち自身の祖父母と同世代の主人公を想像したと考えられる。

絵本で描かれているおばあさんはしわもなく若く描かれている（資料2参照）。その絵を使用した絵本の読み聞かせ後の学生の自由記述では、75%の学生が50～60代と記述している。また、「お話」後のアンケートでは0%であった、40代と記述している学生が、絵本の読み聞かせ後には12%いた。一方で、「お話」後では30%の学生がおば

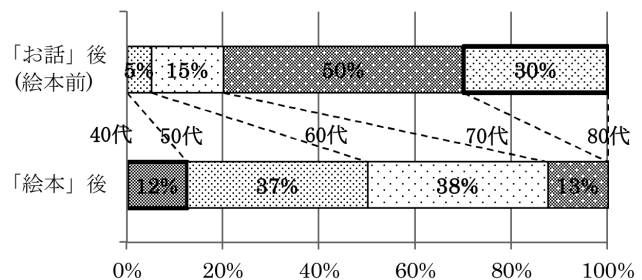


図8 おばあさんの年齢

あさんを80代と想像していたが、絵本の読み聞かせ後には80代と想像する記述は0%であった。これらの結果より、おばあさんということばから想像した年齢を、その後に絵本の絵を見ることにより影響を受け、主人公のおばあさんの年齢を若く設定しなおしていることがわかる。

また、「お話」と絵本の読み聞かせでのおばあさんの姿の想像の差が大きく見られた。

「ちいちゃいちいちゃい」という昔話は、主人公が墓場で骨を拾い、その骨でスープを作ろうと持って帰ってくるという聴き手にとって少し怖い設定になっている。それ故に「お話」からの印象では魔女のようなおばあさんを想像した記述が多く見られた。一方で絵本の読み聞かせ後のおばあさんのイメージの記述では、魔女のようなおばあさんを想像する記述は少なく、また、絵本の読み聞かせ後の記述に「自分の想像していたおばあさんと違う」という内容のものもあった。それは絵本の絵はとても明るく、善良な印象のおばあさんが描かれていた故に、「お話」の時に多かった少し怖

い魔女という想像とは違う記述が多くなったと考えられる。

## 5. 考察

以上の結果を通して「お話」と絵本の読み聞かせでは、聴き手の想像の様子に大きな違いがみられることが分かった。

まず、おばあさんの身長やおばあさんの年齢の想像結果より、「お話」での想像の膨らませ方が、聴き手自身の物語体験や実体験などの、実際の経験がベースになっていることがわかった。一方で絵本の読み聞かせでは、絵からの情報で聴き手の想像を変更している様子が見えかけた。

また、「お話」後の質問では、回答が多岐性が見られた。これは、聴き手の様々な経験や体験の差が想像の多岐性に表れていると考えられる。一方で絵本の読み聞かせ後の質問では回答が集約される傾向が見られた。これは、聴き手自身の想像と絵本の絵の描写を照らし合わせて、絵に合わせるような修正を行っているからと考えられる。

このことから、絵を見ずにことばで頭の中に描く想像の世界と絵を見て想像する世界では各自自由に想像する想像の多岐性において違いがあるということが分かった。

「お話」からの想像の特徴は、聴き手それぞれの想像の多岐性である。絵に縛られない分、聴き手それぞれが自由に想像している様子が見えかける。そして、「お話」を楽しんで聴くことは、聴き手の想像の独自性を育てる活動といえる。この独自性が聴き手の個性を育てていくことにもつながると考えられる。

また、ことばから想像を広げる源が、自身の様々な経験や体験を基本にしていることから考えると、「お話」を楽しめる力は、聴き手自身の実際の経験や実体験をしっかり感じる力が基本となっていると言え、「お話」を楽しむことにより実際の経験や実体験をしっかり味わい感じとる力も豊かにしていくとも考えられる。

## おわりに

本論文では「お話」独自の良さとして、聴き手の想像の多岐性、想像の独自性を育てるということに注目して論じた。「お話」独自の良さは他にも多くある。その一つ一つを今後明らかにしていきたい。また、「お話」の覚え方や保育現場での導入という、保育者にとって導入しやすい「お話」の手法についても今後検討していきたい。

また、「お話」では絵に頼らない想像の独自性が育てられるが、一方で絵本の読み聞かせでは、絵がある分、まだ実際の経験や実体験が少なく、想像の独自性を持ちにくい小さな子どもたちにとって、絵が想像へと導いてくれる役目を果たし、そのために聴きやすいという良さがある。それ故に絵本の読み聞かせの方が低年齢の子どもたちに受け入れられやすく、また「お話」より比較的長い



物語でも聴き手の集中が保ちやすいなど絵本の読み聞かせならではの良さがあるといえる。

このように、それぞれの良さがある故に、「お話」と絵本の読み聞かせが、保育の現場でそれぞれふさわしい場面で上手く使い分けられるようになることが、子どもたちのより豊かなことばを育てる活動につながると考える。

豊かな想像と豊かなことばの世界を持った子どもたちが一人でも多くなるような保育現場での取り組みについて、これからも考えていきたい。

## 引用文献

- 1) 学校教育法 文部科学省 平成26年6月27日法律第88号
- 2) 幼稚園教育要領 領域言葉 ねらい (1) 文部科学省 平成20年3月28日 文部科学省告示第26号
- 3) 前掲書 領域言葉 ねらい (2)
- 4) 前掲書 領域言葉 ねらい (3)
- 5) 松井直著『声の文化と子どもの本』日本キリスト教団出版部 2007年 P.23
- 6) 松井直前掲書 P.13
- 7) 幼稚園教育要領 領域言葉 内容の取扱い (3) 文部科学省 平成20年3月28日 文部科学省告示第26号
- 8) 松岡享子著『サンタクロースの部屋 ―子どもと本をめぐって―』こぐま社 1978年 P.22
- 9) 松岡享子前掲書 P.77
- 10) 松岡享子前掲書 P.82
- 11) W-J.オング著 桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳『声の文化と文字の文化』藤原書店 1991年 P.23
- 12) 松岡享子前掲書 P.83
- 13) 松岡享子著『たのしいお話 お話を子どもに』日本エディタスクール出版部 1994年 P.48
- 14) 松岡享子前掲書 P.54
- 15) 松岡享子前掲書 P.49
- 16) 松岡享子前掲書 P.54
- 17) 松岡享子前掲書 P.49
- 18) 河合隼雄・阪田寛夫・谷川俊太郎・池田直樹著『声の力』岩波書店 2002年 P.21
- 19) 脇明子著『物語が生きる力を育てる』岩波書店 2008年 P.133
- 20) 松岡享子前掲書 P.50
- 21) 松岡享子前掲書 P.50
- 22) 松岡享子前掲書 P.57
- 23) 脇明子著『読む力は生きる力』岩波書店 2005年 P.61
- 24) 脇明子前掲書 P.79
- 25) 松岡享子前掲書 P.31

- 26) 松岡享子著『質問に答えて(たのしいお話8)』 東京子ども図書館 1975年 P.50  
27) 松岡享子前掲書 P.50  
28) 福光えみ子・福知トシ・福井研介・大江多慈子編『子どものための世界のお話』 新読書社 1994年  
PP.58-61  
29) トミー＝デ＝パオラ絵 ジル＝ベネット再話 ゆあさふみえ訳『ティーニイタイニイちいちゃいおばちゃん』 偕成社 1988年

#### 資料1

ちいちゃいちいちゃい (イギリス童話 石井桃子訳)

福光えみ子・福知トシ・福井研介・大江多慈子編『子どものための世界のお話』新読書社 1994年 より  
むかし、あるところに、ちいちゃい、ちいちゃいおばあさんが、ちいちゃい、ちいちゃい村の、ちいちゃい、ちいちゃい家にすんでいました。さて、ある日、このちいちゃい、ちいちゃいおばあさんは、ちいちゃい、ちいちゃいぼうしをかぶって、ちいちゃい、ちいちゃい家から、ちょっぴり、散歩にでかけました。それから、ちいちゃい、ちいちゃいおばあさんが、ほんのちょっぴりあるいていくと、ちいちゃい、ちいちゃい門のところまでました。そこで、ちいちゃい、ちいちゃいおばあさんは、ちいちゃい、ちいちゃい門をあけて、ちいちゃい、ちいちゃい教会の墓地にはいっていきました。すると、ちいちゃい、ちいちゃいお墓の上に、ちいちゃい、ちいちゃいほねが、のっかっていました。

そこで、ちいちゃい、ちいちゃいおばあさんは、  
「このちいちゃい、ちいちゃいほねを、わたしのちいちゃい、ちいちゃいおなべで煮て、ちいちゃい、ちいちゃいテーブルでたべるスープをつくりましょう。」  
と、いいました。

それから、ちいちゃい、ちいちゃいおばあさんは、ちいちゃい、ちいちゃいポケットに、ちいちゃい、ちいちゃいほねをいれて、ちいちゃい、ちいちゃい家にかえりました。

さて、ちいちゃい、ちいちゃいおばあさんは、ちいちゃい、ちいちゃい家にかえると、ほんのちょっぴりくたびれました。そこで、ちいちゃい、ちいちゃいはしごだんをのぼって、ちいちゃい、ちいちゃい寝ばやにいて、ちいちゃい、ちいちゃいほねを、ちいちゃい、ちいちゃい戸だなにしまいました。

そして、このちいちゃい、ちいちゃいおばあさんが、ほんのちょっぴりねむったとおもうと、ちいちゃい、ちいちゃい声が、ちいちゃい、ちいちゃい戸だなから  
「おれのほねをかえしてくれ！」  
と、いいました。

ちいちゃい、ちいちゃいおばあさんは、ほんのちょっぴりこわくなって、ちいちゃい、ちいちゃい頭を、ちいちゃい、ちいちゃいふとんの下にかくして、また、ねむりました。そして、また、ほんのちょっぴりねむったとおもうと、また、あのちいちゃい、ちいちゃい声が、ちいちゃい、ちいちゃい戸だなから、ほんのちょっぴり、まえより大きな声で、

「おれのほねをかえしてくれ！」

と、いいました。

これをきくと、ちいちゃい、ちいちゃいおばあさんは、ほんのちょっぴりまえよりこわくなって、ちいちゃい、ちいちゃい頭を、ちいちゃい、ちいちゃいふとんの下にかくして、また、ねむりました。そして、また、ほんのちょっぴりねむったとおもうと、また、あのちいちゃい、ちいちゃい声が、ちいちゃい、ちいちゃい戸だなから、まえよりほんのちょっぴり大きな声で

「おれのほねをかえしてくれ！」

と、いいました。

そこで、ちいちゃい、ちいちゃいおばあさんは、まえより、もうちょっぴりこわくなって、ちいちゃい、ちいちゃい頭を、ちいちゃい、ちいちゃいふとんからだして、ちいちゃい、ちいちゃい声を、いちばん大きくして、

「もっていきな！」

と、いいました。

## 資料2

トミー＝デ＝パオラ絵 ジル＝ベネット再話 ゆあさふみえ訳 『ティーニイタイニイちいちゃいおばちゃん』  
偕成社 1988年 表紙及び挿絵（一部）

表紙



挿絵（一部）



### 資料3

絵本の読み聞かせと「お話」の違いについてのアンケート（2014年1月実施）

「ちいちゃいちいちゃい」を聴いて

1. 素話で「ちいちゃいちいちゃい」を聴いたときのおばあさんについて

①おばあさんの身長はどれくらいだと思いましたか。

5～10cmくらい 30cmくらい 1mくらい 140～150cmくらい その他（ ）

②おばあさんの服装はどんな感じだと想像しましたか。

③おばあさんの帽子の色は何色だと思えますか。

2. 絵本の読み聞かせで「ちいちゃいちいちゃい」を聴いたときのおばあさんについて

①おばあさんの身長はどれくらいだと思いましたか。

5～10cmくらい 30cmくらい 1mくらい 140～150cmくらい その他（ ）

②おばあさんの服装はどんな感じだと思えますか。

③おばあさんの帽子の色は何色だと思えますか。